

**繰り返さないで! チェルノブイリ・フクシマ
チェルノブイリ原発事故38年の集い
地震列島日本に原発はいらない!**

2024年 4月21日(日) 午後1:30~4:30

ドーンセンター(4階, 第3大会議室)

(京阪「天満橋」駅、Osaka Metro 谷町線「天満橋」駅 ①番出入口から東へ約350m)

(資料代: 800円 学生・障がい者 400円)



*** プログラム ***

1. <事務局報告>

チェルノブイリ38年・フクシマ13年~ヒロシマ・ナガサキ80年に向けて

2. <お話し>

近藤 正道さん(弁護士・柏崎刈羽原発運転差止訴訟弁護団)

「地震大国日本に原発はいらない」

~柏崎刈羽原発反対運動を軸に~

3. <コメント>

能登半島地震について

長沢啓行さん(若狭連帯行動ネットワーク・資料室長)

珠州原発反対運動との交流

久保きよ子・良夫さん(若狭連帯行動ネットワーク)

4. <歌&演奏> アカリ・トバリさん

5. <メッセージ> チェルノブイリから: ベラルーシ「移住者の会」

6. 質疑・応答, 討論

7. アピール

【ゲストのプロフィール】

近藤正道さん:

1947 年生まれ、77 歳

柏崎高校、中央大学法学部 卒業。

新潟県議会議員 4 期、参議院議員(社民)1期

2020 年、柏崎市長選を原発反対の立場で闘う

現在 弁護士(新潟市西区在住)

柏崎刈羽原発運転差止訴訟弁護団

新潟県原水禁理事長



今年の元日に能登半島地震が起こり、甚大な被害がもたらされました。被害に遭われた方々に心からお見舞い申し上げます。運転停止中の北陸電力志賀原発にも基準地震動を超える揺れが襲い、外部電源を受電する変圧器に亀裂が入り、大量の油漏れで送電線の一部が使えなくなるなど重大な損傷を受けました。また原発敷地内には多くの隆起・沈降が見られ、地盤が脆弱なことも明らかになりました。いまだに被害の全容は不明です。そして、重大事故時の避難計画は全く役に立たないことが白日の下に晒されました。

想定されていた以上の 150km の海底断層が連動し、また陸域の断層も含め広範囲に連動したことで、これまでの断層評価と基準地震動の見直しが不可避です。今回の地震は、地震列島の原発の危険性を改めて示し、チェルノブイリ、フクシマを繰り返させないためにも稼働中の原発はすぐに止めるべきです。

また、震源地の珠州での原発建設計画を凍結に追いこむ運動を担われた住民の方々が、甚大な被害を受けておられることにも私たちは心を痛めています。珠州原発反対運動は、1989 年以降、大阪での「あしたが消える」のドキュメンタリー映画上映会(当時の連絡窓口は、今回コメント講師の長沢啓行さん)を契機に、日高原発反対運動(日高原発に反対する大阪の会の久保さん夫婦と日高の反対派漁民浜一巳さん)との交流がありました。久保きよ子・良夫さんには当時の交流についてもお話し頂きます。もし珠洲原発が建設されていたら…福島と同じような重大事故が起こり、しかも孤立した集落では避難もできず…と背筋が凍る思いです。

能登半島地震により新潟でも液状化などによる被害が出ています。能登半島と同じく、日本海側の福井(関西電力原発)、新潟も、度々地震に見舞われているのに、原発を次々と再稼働しようとする政府と電力会社の方針をなんとしても止めなければなりません。

福島で重大事故を起こし、あれほどの深刻な被害をもたらしている国と東京電力が、その反省もなく、被害者への賠償もまともに行わず、被害者支援を次々に切り捨て、その一方で、柏崎刈羽原発 6・7 号機を再稼働しようとしていることに、私たちも福島事故被害者の方々とともに、強い憤りを感じています。原発再稼働を前提に、会社「再建」計画を立て、「その収益で福島の被害者に賠償を行う」などと、政府も財界も本末転倒な主張で原発推進と東電の延命を行おうとしているのは言語道断です。

「集い」では、新潟から近藤正道さんをお迎えし、再稼働が目論まれている柏崎刈羽原発をめぐる現状、運動の実情などをお聞きし、新潟・福島ともつながって、関西で何ができるか等々話し合いたいと思います。多くの方々の参加を呼びかけます!



問合せ：072-253-4644(猪又), cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

長崎被爆者・山科和子さん/「救援関西」代表の意志を引き継いで・・・



去る3月13日に、「救援関西」の代表、長崎被爆者・山科和子さんが急性肺炎のために永眠されました。享年102歳でした。一週間くらい前から発熱があり手を尽くしたが叶わなかったとのこと。

あの華奢な身体に強固な意志とバイタリティーがあふれていた山科さんが逝ってしまった・・・。

本当に急なことであり、もうお会いできないと思うと悲しく、寂しさがじわじわとこみ上げてきます。

晩年は施設で過ごされていましたが、面会に行くととても喜んで下さり、帰る時はいつも「また来てよ～」と。かつて、健康のために毎日1万歩歩くと言って山科さん。公園に散歩に行くことが大好きで、青い空を思いっきり吸い、花を眺め、歌い、出会った子どもたちに話しかけたりされていたのがつい昨日のことに思い出されます。永眠される3週間前にもいつもの長居公園に車いすで散歩に行かれ、梅の花やパンジーを愛でたり、大きな声で一緒に歌うなどすこぶる元気だったとのこと。



山科さんは23歳の時に、長崎原爆で一瞬にしてご両親・弟妹を亡くされました。ご自身も被爆のために何度も大病を患われたそうです。被爆20年後に大阪に来られて原水禁運動に出会い、被団協の活動にも精力的に参加されました。そして、体の不調や被爆者差別を「明けない夜はない」と乗り越えてご自身の被爆体験や戦争体験を語られるようになりました。「生き残った被爆者の使命」として、学校や反核・平和集会などで、被爆体験の「語り部」活動を続けてこられました。山科さんの活動は日本国内に止まらず、海外何カ国もの国々でも被爆体験を語られました。二度と戦争をしてはならない、核を使ってはならないと全身で訴えてこられました。

原爆も原発もヒバクシャをつくってしまう…と、1991年「救援関西」発足の早い時期から代表となられ



「発足」の集会であいさつ(1991.11)

ヒバクシャ連帯・支援の活動を支えて下さいました。1996年にはベラルーシのチェルノブイリ被災地を訪問し、現地の学校で子どもたちに被爆体験を語られ、ヒバクの「先輩」として子どもたちを励まされました。また、チェルノブイリ・ヒバクシャの方々を日本にお迎えした時には先頭に立って歓迎され、学校や各地を案内され、被爆地・広島にも同行されて被爆者の方々との交流の橋渡しもされました。



広島訪問(2001.4)



「チェルノブイリ事故 15 年の集い」(2001.4)



自宅に招待(2001.4)



「チェルノブイリとフクシマ交流企画」(2012.4)

ずっと続けてこられた学校での語り部活動は、2013年5月の富田林第一中学校が最後となりました。いつも持ち歩いている大きなパネルをバックに被爆体験・戦争体験をリアルに語られ、終わった後もニコニコしながら「私の方が若い人からエネルギーをもらっているのよ」と至極お元気。あの細身の身体のどこにそんなエネルギーがあるのかと思われるほど、90歳を過ぎてもなお語り続けられた山科さん。その不屈の意志とバイタリティーには本当に頭が下がり、敬服させられました。



富田林第一中にて(2013.5)



「集い」で挨拶(2017.4)

「私の原点は『ヒバク』です」と放射能による被害の悲惨さを訴え続け、「被爆体験の語り部」として生き抜いた山科さん。「日本の原発にも反対」「世界に核も戦争もない、美しい新しい時代を子どもたちに受け渡したい」という山科さんの遺志を、私たちは、改めて肝に銘じて、引き継いで行かなければと思います。



自室で長崎原爆慰霊祭を見いる(2020.8.9)

山科さん、長い間、本当にご苦労様でした。心からご冥福をお祈りいたします。いつまでも私たちの活動を天上から見守っていて下さい。(猪又)

山科さんを偲ぶ会

- * 日時:6月23日(日) 午後2時～
- * 場所:大阪市立長居ユースホステル
／多目的室
- * 問合せ先:「偲ぶ会」実行委員会
090-3929-0053(寺澤)
(詳細は決まり次第 HP にアップします)



長居公園にて(2023.5)

マーシャル諸島での3月1日～「核被害者を思い起こす日」

1954年3月1日「ビキニ事件」（ビキニ環礁で暗号名「ブラボー」の水爆実験が行われた。風下で操業をしていた日本のマグロ漁船「第五福竜丸」も被災した。）から70年にあたる、今年の3月1日前後に、マーシャル諸島に「調査」*に行ってきました。マーシャル諸島では3月1日は、「核被害者を思い起こす日」（Nuclear Victims Remembrance Day）として、核被害者を思い追悼するための国の公休日とされています。首都のマジェロでは3月1日の朝、街の中心部の博物館前の広場に人々が集まり、記念式典が行われるマーシャル諸島大学の会場までパレードを行いました。子どもたちも各学校ごとに横断幕を持って先生たちと一緒にパレードに参加していました。

マーシャル諸島の人々は、大国の植民地支配の下で翻弄され続けてきました。第二次大戦中は日本軍に「南洋支配」の拠点として占領され、大戦末期には日米の戦闘に巻き込まれ、そして戦後は国連の信託統治の名の下に米国の支配下に置かれ、1946年から1958年まで67回（ビキニ環礁で23回、エニウエトック環礁で44回）の核実験が行われました（爆発威力は広島型原爆7000発以上に相当）。そして今も、太平洋における米国の



学校ごとにパレードに参加する子供たち

軍事的要衝（米軍基地のあるクワジェリン環礁は、カリフォルニアの「バンデンバーグ空軍基地」から発射されるミサイル実験の標的に使われている）の一つとして実質的な「植民地支配」が続いています。米国は、核実験のフォールアウトで被ばくした風下の環礁の人々を、放射線被ばくの人体影響を調べるための「実験の材料」として扱ってきました（米軍は「プロジェクト4.1」と呼ばれる研究の一環として、ロングラップ、ウトリックの人々を登録し、治療もせずにデータのみをフォローして収集した）。そして4つの環礁（実験場になったビキニ、エニウエトック、及び風下のロングラップ、ウトリック）の人々のみを「核実験被害者」とし、その「線引き」から外れたさらに風下の環礁や島の住民は、いまだに被害者として認めていません。

今年3月1日の記念式典で、ヒルダ・ハイネ大統領（マーシャル諸島で初めての女性大統領）は、「核被害者を思い起こす日」は、「核の遺産のため」というより、米国の核実験によって汚染し被ばくさせら



式典でスピーチするヒルダ・ハイネ大統領

れている「今も続く課題に対処するよう力を合わせるために集う日です。」と挨拶の冒頭で述べました。そして、この70年、マーシャルの人々に放射線の人体影響調査のための人体実験（プロジェクト4.1）がされたこと、多くの愛する人々を「放射線による病気」で失ったこと、風下諸島の被害が無視されてきたこと、ネバダ核実験場の放射能汚染土が130トンもマーシャルの環礁に投棄されたこと、国連に核実験を止めさせるよう訴えた（1954年、1956年）こと等々を述べました。さらに、「ウラン採掘、プルトニウム利用、核兵器製造・実験、放射能放出、汚染地域の除染、核廃棄物の貯蔵・処分などによって、土地や人々が被害を受けてきた、

他の先住民のコミュニティとも私たちは連帯し団結する。強要した国に対して、“もうたくさんだ！NO MORE!”と、訴えました。

式典では、被害コミュニティを代表してビキニ市長が、70年経っても帰ることのできない故郷への想いなどを切々と訴えました。また、挨拶に立った米国大使は「安全保障のためにマーシャルの人々が犠牲を払った」ことを「称賛する」ようなことを述べ、もちろん謝罪の言葉は一言もありませんでした。

式典の他に、1日前後には、マーシャル諸島大学の学生サークル「核クラブ」による核実験とその被害についての展示、学生による核兵器禁止条約についてのディベート、コンサートや詩の朗読の催しなども開催されました。核実験被害の問題について、若い人々の関心も喚起して伝えてゆこうという努力がされているのを感じました。(振津かつみ)

(* 振津は、「核実験によって奪われた“正義”を取り戻すための医療・社会調査」という、マーシャル諸島共和国の核委員会、保健省と日本の研究チームの共同プロジェクトの一環で「医療調査」を担当しています。今回は、核実験フォールアウトによって被ばくしたにもかかわらず、米国から被害地域として認められていない環礁の一つであるアイルック環礁での住民調査を行いました。この調査についての報告は、別の機会に譲ります。)

2024年3月10日さよなら原発関西アクション

福島第一原発重大事故から13年。今年の「関西アクション」は久々の野外、中之島公園で開かれました。

私たちは、あの事故から前進できたのか？廃炉の目途も立たず、放射能汚染は続き、コミュニティは元に戻らず、被害者の生活も再建途上です。しかし政府は反対に、避難指示区域の医療等の支援の打ち切りを進め、放射能汚染水の海洋投棄を強行し、原発利用を「国の責務」として強力に推進しています。そこに、この1月1日の能登の地震です。

4月21日の救援関西の集会をご案内しようとビラを撒くと、地震列島の原発の危険性に危機感を持つ方々、避難者の方や古くからの顔見知りの方々、チェルノブイリはどうなってるの？戦争がねえ・・・と聞く方、次々と声がかかりました。

集会は、おしどりマコ・ケンさんの脱原発トークライブ、福島からの避難者菅野みずえさんのアピール、福井から松下照幸さんのアピールを受けて、青空の元、デモ行進へと続きました。主催者発表700人。



【おしどりマコ・ケンさん】

原発事故の取材をはじめ、私たちは、様々なことに本当に不勉強なことに気づき、公害や薬害の取材も始めました。水俣では「公害に第三者はいない」「力のある者と力のない者の争いを、周りで見ていることは中立ではなく力のある者の味方をするようになる」と聞きました。



2011年から、東電の定例会見に毎回参加しています。1400回を越えました。マスコミは来なくなり、参加者はだんだん減り、先日は、東電担当者2人とマコケン2人の差し向かい(笑)になりました。報道も少なくなり、世間の関心が薄れているのがわかります。

しかし。とは言っても、福島の現地の状況、汚染水の事も、かなり熱心に取材されている方々は確かにいるのに、なぜ大事なことが世間に伝わらないのだろう？と置いていたら、政府の宣伝情報操作に(電通等に!!)桁違いの巨額資金が使われ、情報操作の専門家がだかりに動いていました。ネガティブ情報排除をうたい文句に！たとえば、旧ジャニーズの人気者に、福島でボランティアをしているような雰囲気でも桃を食べさせる時も、「安全です」とは言わないよう「美味しいです」とだけ言うように細かく指導していました。原発事故後、省庁や自治体は電通になにをさせてきたか！暴露していきたいと思います。

何かしなくちゃとは感じるけど何をしたらいいの？世間の関心も薄れてる？という方はおられると思います。私たちは、実は社会を変えるのは自分の半径5mを変えていくことかなと思います。何をかうか？誰と話すか？何に時間を使うか？家族のおしゃべりが世論になっていく？こつこつと、丁寧に、暮らしの中で、私たちが、社会を変えていきましょう！

【菅野瑞江さん（福島県浪江町からの避難者）】

能登の方々を心配する沢山の方々の発信を知り、13年前のあの時も、きっと沢山の方々が私たちに案じて下さっていたのだと今頃になって思い至ります。あの時は、Wi-Fiも使えなくなり、情報も少なく、何か言えば「自分たちが原発を誘致したからだ」「天罰だ」「迷惑だ」と言われたり、飲食店やガソリンスタンドで「福島ナンバーお断り」されたり、本当に肩身の狭い思いでした。世間の人に心配されているとはとても思えませんでした。しかし、こうやって心を寄せて下さっていることを、今は肌身に染みて思うことができました。皆さんあの時はご心配いただき本当にありがとうございます。

故郷の状況は今も厳しい。今も3月が近づくと、眠れない。この1月1日もショックでした。

原発事故では誰も死ななかったと言われるが、沢山の動物がひどい死に方をしました。線量は高いままです。先日我が家の裏のスズメバチの巣は10.2gで33520Bqありました。故郷の被ばくの影響や暮らしの課題は本当にこれからです！

避難者が何を頑張らなくてはならないか考えながら、ご一緒に、原発はいらないのだと身に染みてわかったことをお伝えしながら、共に歩ませてください。

【松下照幸さん（美浜町町議会議員）】

本当に心配しています！

最近も（大飯3号機一次冷却系）炉心近くの細管のひび割れ（細管といっても11ミリ）があった。これが破断したら、直ぐに炉心が露出する可能性があり、本当に危険です。関電はこれを取り換えずに運転を強行しようとして、規制庁に説明を何度も求められ、やっと取り換えました。検査点検も、原発の検査制度の変更で、各電力会社まかせになってしまっているのです。

そして、原発の今の一番のリスクは老朽化です。ひびが入っても、新しい時はまだ金属に粘り気があり大事故に至る前に発見されやすいが、老朽原発になると粘り気が低下し破断しやすくなる。近いうちに、ある日突然、きっと関西電力の原発で、重大事故が起こるのではないかと私は思っています。(間) 巨大原発の老朽化を正確に判断する技術はありません。さらに設備点検をする作業は被ばくを伴いますが、電力社員は高線量のところには入らず、下請け企業の作業員が点検修理を行います。これは私が直接聞きました。これでは「原発は安全」とはなりません。

原発は当初から、核廃棄物を処理できず、廃棄物を「再び使う」として「使用済み核燃料」という名前を付けました。でも実際は「核のゴミ」。それが燃料プールに溜まり続け、運転を停止せざるを得ないところに来ています。その中で、核燃料を乾式キャストに移動して、無理に運転を続ける危険な動きがあります。美浜3号機のプールから210体の使用済み核燃料を乾式貯蔵施設に移動し、そのスペースに新たな使用済み核燃料を満たせば、60年運転が可能になります。原発は止まっていることが最大の安全。危険な老朽原発の運転を止めることが最大の安全です。

小さい町ですが、挟み込みの「村生き活き」の便りを発行し、(原発のない)町作りを訴えています。
(由美)

2024 原発のない福島を！ 県民大集会



3月16日、福島市のパルセいいざかで、「2024 原発のない福島を！ 県民大集会」が開催されました。コロナが5類に移行して初めての県民大集会で、全国からの参加者も増え、主催者発表1100名の参加でした。この集会は「二度と福島を悲劇を繰り返さないよう、私たちは訴えます！ 福島を忘れないよう、私たちは発信します！」と、2012年から毎年開催されてきました。今年も、福島からの訴えとして、元森林管理署職員の佐藤晴夫さん、福島原発事故津島被害者原告団長の今野秀則さん、

療所の栄養士の鶴島綾子さん、会津電力特別顧問の佐藤彌右衛門さんが登壇されました。

「自然溢れる環境の中、互いに協力して受け継がれてきた歴史や伝統、文化、地域に根付いた生活…原発事故のためこれらの一切を根こそぎ奪い去られ、身が震える憤りと故郷への痛切な想いを胸に、異郷で避難生活を送らざるを得ない状況にある。…規制解除された拠点区域内には復興住宅10棟(現在7世帯入居)の整備、役場支所が設置されたが、謂わば帰還困難区域という大海に浮かぶ小舟同然の状況…」(今野さん配布レジメより)。そのような中で、津島地区住民で原告団を結成して国と東電を被告として訴訟を闘っているという浪江・津島の今野さんが、「13年経った生活再建の実情を話して下さいと言われたが、私たちは再建以前の状況です」と話されたのが印象に残りました。

集会主催者は、「福島を風化させるな！」という言葉で全体をまとめました。「福島を風化させるな！」でとどまっていけないだろうか…国や東電の責任を問うた発言者の訴えや、また能登半島地震も目の当たりにして地震国日本での原発の危険性を改めて思い知らされ、原発再稼働反対にも取り組む全国からの参加者の思いにはそぐわない…そんな違和感を感じました。
(ふりつ)

ベラルーシ/ジャンナさんからのメッセージ

ミンスク、マリノフカ 3月4日

〈かつみさんへ〉

こんばんは。メッセージをありがとう！

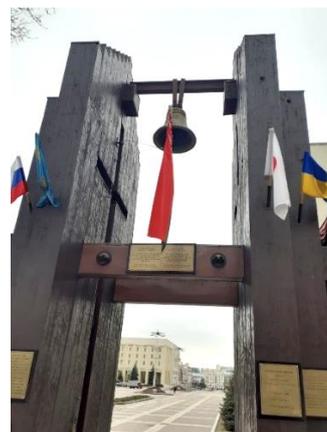
あなたは精力的に活動を続けていますね。羨ましいです。私たちは社会的な活動を行うことが難しく、今は病気の移住者を見舞うことぐらいしかできません。私たちの活動は人々を支援することで、大変な活動ですが同時に喜びも大きなものなのに・・・

12月の発足集会の写真もありがとうございます。日本の友人が懐かしいです。

能登半島地震のニュースを読んで、心が痛みます。被災された地域の住民の方々に「移住者」より心からのお見舞いの言葉をお伝えください。

「普通の生活」が早く戻って、1日も早い再会が叶いますように！ ナローブリアヤクラスノポリエにも行きましょう。もちろん、マリノフカのチェルノブイリ移住者も再会を願っています。どんな困難も、人々の絆を壊すことはできませんから。

息子のアレクセイもあなたのやさしい言葉に感謝しています。皆がよろしくと言っています。かつみさんが4年間もベラルーシに来ていないなんて信じられません。とても寂しく悲しいです。日本の友人の皆さんともお会いしたいです。先日、長崎からミンスクの教会に贈られた「長崎の鐘」を見に行ったので、写真を送ります。



ナローブリアにあるジャンナさん(「移住者の会」代表)の生家の前で。今も住むことができない高汚染地。(2018.10)

福島佐藤龍彦さん^{注)}がベラルーシに来てくださったこと、よく思い出します。よろしくお伝えください。救援関西のスタッフの皆さんやそのご家族、日本の友人の皆さまにもよろしくお伝えください。

かつみさん、マーシャル諸島へ行かれるとのこと。私もマーシャルの核実験のことは読んだことがあります。マーシャルの写真も送ってくださいね。実り多い旅になりますように。旅のご無事と元気に帰って来られることをお祈りします。

ベラルーシから、深い愛を込めて
ジャンナより

追伸：今日は「国際祖母の日」(International Grandmother's Day)です。かつみさんはチェルノブイリの子どもたち(もう大人ですが…)を長年にわたって支援してくれています。みんなの「おばあちゃん」的存在ですね。なので、「おばあちゃん」へ、感謝の言葉を送ります！

注) 佐藤龍彦さん

福島県楡葉町在住。福島事故後、7回の避難を繰り返した後、避難指示の解除された楡葉町に帰還。事故被害者の生活再建、健康保障、トリチウム汚染水の海洋放出反対等の活動に取り組む。

チェルノブイリ被害者との交流を続ける中で、2018年、チェルノブイリ被災地を訪れる。同じ原発事故被害者として交流を深め、事故を繰り返させないために脱原発の活動も行っている。

.....

ミンスク、マリノフカ 2024年3月

〈佐藤龍彦さんへ〉

もうすぐ3月11日がやってきます。13年前、多くの日本の人々の運命が変わってしまいました。私たちは違う国に住んでいますが、チェルノブイリ事故後にベラルーシの人々が経験したのと同じ「核の平和利用」の被害に苦しんでいます。

私は福島に行った時に、避難者の仮設住宅であなたのお母さんにお会いしたことをよく覚えています。狭い部屋に物を詰め込んだ箱が積まれ、その中で暮らしておられたお母さんの姿が今でもまぶたに浮かびます。思い出す度に涙が溢れてきます。福島原発事故の後に、あなたのお母さんや多くの人々が強いられた苦しみと同じような困難な生活を私たちも経験しました。お母さんが、私を喜んで迎えてくださり、自分で採った山菜を料理してご馳走してくださったことを、感謝の気持ちを持って思い出します。心からの挨拶をお母さんにお伝えください。4年前にあなたがベラルーシを訪問して下さったことはとても良かったです。今は、それもないません。交流できる日々が戻り、またお会いできることを願っています。



3月11日に、私はミンスクの日本公園に行くつもりです。津波で亡くなった方々を追悼し、今一度、広島・長崎の原爆で死傷した方々、そして福島事故被害に苦しんでいる方々に想いを寄せるために。



公園には桜が植えてあって、暖くなる4月に開花し、とても美しいです。私は日本の「桜の地図」を持っていますので、福島でいつ桜が満開になるかが分かります。その時には、自分が日本の友人の方々と一緒にお花見をしているつもりで、心の中で満開の桜を愛でたいと思います。

佐藤さん、私たちは人々が安全に暮らせるようにと、共に手を携えて多くの活動をしてきましたし、今もその活動を続けています。私たちの活動が成果をあげ、将来、子どもや孫たちがその活動を引き継いでくれますように。そして、これ以上、世界で様々な事故や惨事、戦争が起こりませんように。

福島の方々の皆さんへ心からの挨拶を送ります。
皆さんのご健康とご多幸をお祈りします。

ベラルーシから深い愛を込めて
ジャンナ

ミンスク・マリノフカ、3月10日

〈3月11日に向けてメッセージ〉

明日は3月11日。福島第一原発事故の惨事から、また新たな記念日を迎えます。

ベラルーシでは、故郷に二度と戻れないチェルノブイリの移住者が、皆さんのことを思い起こしています。

「核の平和利用」による原発の事故が引き起こした大惨事。私たちの当たり前の生活を破壊し、私たちの健康、子どもたちや孫たちの健康に危害を及ぼしているのです。

放射能汚染地域に住むことが私たちの健康にどのような影響を及ぼし続けるのかはまだ明らかにされていません。できるだけ被害が拡大しないことを願いましょう。皆様のご健康を祈り致します。

私は芭蕉の桜の句を思い出します：

命二つの中にいきたる桜かな

桜の開花が、私たち皆を、生活の喜び、希望、楽観主義で満たしてくれますように。

ベラルーシから深い愛を込めて

チェルノブイリの被害者 ジャンナ・フィロメンコ

カンパ・会費の納入ありがとうございました

(2024.1.30~2024.4.7)

東野セツ 市場淳子 森本良子 徳井和美 小副川久代 大平文昭 末田一秀 三原翠 田原良次 佐藤
みえ 神崎加与子 藤田達 山崎知行 中井かをり 門林洋子 山崎隆敏 泉迪子 斎藤直樹 宗泉寺
旦保立子 畑中宏子 安田美津子 金子龍太郎 田伏和子 寺西清 阪口博子 中城昭夫 富田洋香 丸
本加寿世 原発の危険性を考える宝塚の会 松本郁夫 谷岡文香 (順不動・敬称略)

カンパ・会費納入のお願い

昨年12月、「救援関西」は発足32年の集いを無事に迎えることができました。ひとえに、皆様の温かいご支援・ご協力に支えられてのことであり、心より深く感謝いたします。

今年元日に起きた能登半島地震により、地震列島日本での原発の危険性を改めて考えさせられ、そして、フクシマを思い起こしました。事故後13年経ってもフクシマは終わっていません。

ウクライナでは今も戦争が続き、チェルノブイリの被害者との顔の見える交流はままなりません。

困難な中ではありますが、これからもチェルノブイリ、フクシマの被害者と手を携え、顔の見える関係を大切にしながら、核被害者の人権の確立を目指し、またチェルノブイリ、フクシマを繰り返させないために、微々たる歩みではありますが、進んでいきたいと思っております。

変わらぬ皆さまのご協力・ご支援をどうぞよろしくお願い致します。

なお、すでにご協力いただいている方にも、事務作業上、払込取扱票を同封させていただいています。どうぞご容赦くださいませ。

